

《資料》第2部「田中正造とアジア」を再考する―追悼高際澄雄を偲んで―

- ・ 重田康博客員教授パワーポイント発表資料
- ・ 丁貴連教授コメント資料

2023年度宇都宮大学多文化公共圏フォーラム第29回  
公開セミナー「語り継ぐ足尾Ⅲ」  
問題に抗い続ける人々

## 「『田中正造とアジア』を再考する」 —追悼高際澄雄先生を偲んで—

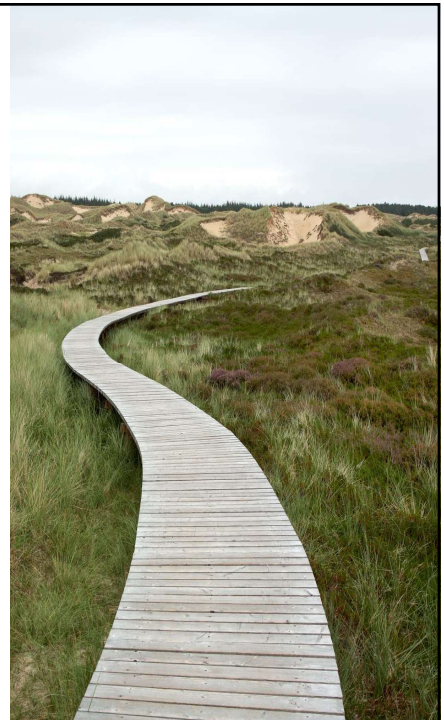
2024年2月21日

宇都宮大学国際学部客員教授  
多文化公共圏センター研究員  
重田康博

1

## 本日の内容

- はじめに—高際先生の訃報に接して
- 1 「田中正造とアジアⅠ・Ⅱ」の全体の概要
  - (1)「田中正造とアジアⅠ」の内容
  - (2)「田中正造とアジアⅡ」の内容
- 2 「田中正造とアジアⅠ・Ⅱ」へのコメント
  - (1)田中正造没後100年記念にふさわしい企画
  - (2)「田中正造とアジア」をテーマにする
  - (3)足尾の環境再生
- 3 「田中正造とアジア」の今後の課題
  - (1)足尾鉱山鉱毒被害は終わっていない、
  - (2)3.11との共通性
  - (3)田中正造のグローバルな環境再生思想と公共圏
- おわりに—まとめとして



2

## はじめに—高際先生の訃報に接して

- 2023年3月30日国際学部名誉教授の高際澄雄先生が74歳でご逝去された。高際先生に心からお悔やみを申し上げたい。
- 高際先生は、宇都宮大学国際学部教授として英語、英語文学を担当されていて、私は2007年4月の赴任後から2014年3月のご退職まで国際学部の教員として関わらせていただいた。
- 高際先生が同大学国際学部附属の多文化公共圏センター（以下CMPS）のセンター長時代に、私は2012年から2013年までの2年間副センター長として仕事をさせていただいた。高際先生とは、同センターの活動として、「学生国際連携シンポジウム（インドネシア、ペラルシー、タイ・カンボジア）」、「田中正造とアジアⅡ」のシンポジウムとスタディーツアー
- イギリスでの高際先生との思い出足利市織姫公民館地球市民講座「イギリスの光と影」（2012年2月）の講師として報告者を招聘。



写真：旧谷中村説明する高際澄雄先生  
高橋若菜2017年6月18日に撮影

## はじめに—本報告の目的

- 本報告では、CMPSで高際先生がセンター長として情熱をかけて主宰した田中正造没後100年記念シンポジウム「田中正造とアジアⅠ・Ⅱ」（宇都宮大学地域連携活動支援事業）の企画について同報告書を手がかりに振り返り、全体の概要、コメント、今後の課題を述べることを目的とする。
- なお、筆者は田中正造研究の専門家ではなく、同企画のⅠには参加せず、Ⅱの方にのみ参加したことを付け加えておきたい。

# 1 「田中正造とアジアⅠ・Ⅱ」の全体の概要

## (1) 「田中正造とアジアⅠ」の内容

○スタディーツアー 2013年12月7日(土) 9時30分-16時

渡良瀬川遊水地と旧渡良瀬川周辺

- ・主な行程：赤麻寺－渡良瀬川堀削地－松安寺伊賀袋－大沼－排水機跡

○シンポジウム 2013年12月8日(日) 10:00-16:00

場所：栃木市藤岡遊水池会館

- ・開会のあいさつとこれまでの経緯 高際澄雄
- ・「田中正造と戦争－日清戦争支持から軍備全廃論へ」赤上剛
- ・「田中正造と韓国－田中正造と 全瑛準と田中正造の公共的生き方」朴孟洙(パク メンス)
- ・「田中正造と内村鑑三、そして朝鮮」丁貴連
- ・パネルディスカッション
- ・まとめと閉会のあいさつ 高際澄雄



5

## (2) 「田中正造とアジアⅡ」の内容

○シンポジウム 2014年9月15日(日) 10:00-16:00

場所：栃木市藤岡遊水池会館

- ・開会のあいさつとこれまでの経緯 高際澄雄
- ・「足尾銅山鉍毒被害の現状」赤上剛
- ・「足尾溪谷緑化事業の現状と展望」鈴木聡
- ・「韓国におけるハンサリム運動と田中正造の自然観と生命観」朴孟洙
- ・「足尾における野生生物の問題」辻岡幹夫
- ・パネルディスカッション
- ・まとめと閉会のあいさつ 重田康博

○スタディーツアー 2014年9月14日(土) 8時30分-16時30分

日光市足尾町周辺

- ・主な行程：草木ダム－足尾銅山精錬所－植樹活動－松木村跡－箕子(すのこ)橋堆積場－中国人殉難烈士慰霊塔－朝鮮人強制連行慰霊碑－毛里田地区

6

## 2 「田中正造とアジア I・II」へのコメント

### (1) 田中正造没後100年記念にふさわしい企画

---

- 高際によると、本企画した理由は、個人的な理由として田中正造が活動した栃木市藤岡町で誕生し、渡良瀬遊水地の自然を守る運動に1991年以来参加。
- 学問上の理由は、環境科学が進歩し近年田中正造研究が進歩してきたことが挙げている（高際a：pp.17-18）。
- 高際は、広い正造の思想、深い正造の思想に着目し、発掘していくべきではないかと問いかけている。
- 企画は、シンポジウムとスタディーツアーを組み合わせたことにより、内容をより豊かなものとし、田中正造の理論と実践への理解を深めることになった。シンポジウムだけでは、参加者は正造について知識として知ることはできても、実践が伴わない。田中正造没後100年記念にふさわしいタイムリーな企画であった。

7

### (2) 「田中正造とアジア」をテーマにする

---

- 次に、高際は、本企画のテーマを「田中正造とアジア」としたことについて、「田中正造の特徴を、私は、高く、広く、深く、豊かである」と述べ、「広い、というのは地域的な広がりがあることです。正造は恐らく世界全体を視野に収めていたのではないかと考えています。韓国、中国、ロシア、インド、そしてヨーロッパやアメリカを考えていた。そして、多くの領域にまたがっています。政治だけでなく、経済、社会、自然、こういったものを包括的に捉えていました。」（高際a：p.21）
- 報告者は、高際が本企画を「田中正造とアジア」と名付けたのは、正造の思想の広がりや深さに共鳴して、彼の思想がアジアや世界を視野に活動し、多くの地域や領域に広がっていくものと捉えていたと考えている。

8

## (2) 「田中正造とアジア」をテーマにする

---

- 朴孟洙（パク メンス）報告（「田中正造とアジア I」）は、「田中正造は、明治27年を前後にして朝鮮の「東学農民革命」や東学農民軍の様子を正しく、かつ高く評価した唯一の日本人である」（朴a p.53）と正造を評価している。朴は「朝鮮の東学農民革命と日本の足尾銅山の共通性」を指摘し、「同じ時代を生きた田中と東学農民革命を率いた全瑋準と正造の「公共的生き方」の重要性を説いている。
- 続く朴報告（「田中正造とアジア II」）は、朴が行っている「ハンサリム運動」は、生命運動であり「文明の転換のための思想」いわゆる「命を生かすような文明」の道を、正造は 120年前に日本でも行っていたと述べている。正造のいう「真の文明のあり方」は、韓国の置かれている状況と同じ問題意識に通じており、韓国で正造の思想が注目されている（朴b.： pp.40-41）。

9

## (2) 「田中正造とアジア」をテーマにする

---

- 赤上剛（アカガミ タケシ）は、東学党の乱（東学農民革命）について、谷中村民葉民策との共通性を述べ、「虐げられる世界人民との連帯」（赤上 a.： p.34. p.42）を提唱している。
- 丁貴連報告（チョン キリョン）（「田中正造とアジア I」）は、足尾銅山鉍毒問題に関わった内村鑑三を紹介し、韓国で高く評価されている内村鑑三が田中正造と韓国をつなぐ存在であり、田中正造の思想は韓国や世界に知られるべきもので、内村鑑三はその手掛かりになるのではないかと結論づけている。

10

### (3) 足尾の環境再生

---

- 足尾銅山鉱毒事件は被害30万人、被害田畑10万ヘクタール、1府5県、足尾銅山の銅生産に銅1トン製造に硫酸・砒素（ともに猛毒）4トン排出、鉱害として煙害、毒水をもたらした。鉱害として、①煙害（亜硫酸、亜砒酸）は渡良瀬川上流の松木村廃村、②毒水（銅、硫酸、砒素、鉛、亜鉛、カドミウム、マンガン）は下流の谷中村廃村となった（赤上 a. :pp.38-39）。
- また、渡良瀬川は度々大洪水で鉱毒被害が明らかになり、銅山の「反対運動」が開始された（赤上 a. :pp.38-39）。足尾の森林は、はげ山となり壊滅し、緑の再生には、数百年かかる。
- 本シンポジウムでは、このような足尾銅山の緑の再生に取り組む二つ事例が以下の通り報告された。

11

### (3) 足尾の環境再生

---

- 「足尾に緑を育てる会」副会長の鈴木聡は、「足尾溪谷緑化事業の現状と展望」の報告の中で、「足尾に緑を育てる会」の活動を紹介し、2500haの面積の半分、50%の緑の再生を実現、この松木の地に100万本植樹を計画し、1年間に1万本とすると100年かかる」（鈴木. pp.28-29）。足尾の山は、環境学習の宝庫、植樹の実績、例えば国、自治体、NPOの協力体制、1歩1歩着実に後世に繋がる活動の実践を目指す。
- 辻岡幹夫は「足尾における野生生物の問題」の中で、足尾における野生動物問題の深刻さ、シカが非常に高い生息密度で足尾、奥日光や尾瀬の緑化植物に大きな影響を与え、今後の栃木県におけるシカ対策の必要性和具体性を述べた。
- これらの足尾の再生事業は、田中正造の自然との共生を目指す環境再生思想の実践である。正造の環境再生思想は、自然環境を守る生命観と自然観に根差している。鈴木と辻岡の活動事例は、足尾の緑を目指す正造の環境再生の理念と運動といえる。

12

### 3 「田中正造とアジア」の今後の課題

#### (1) 足尾銅山鉍毒被害は終わっていない

---

- 最初、「田中正造とアジア」が受け継ぐべきものとして、「足尾銅山被害は終わっていない」ことを語っていくことである。
- 赤上は「鉍毒被害は過去のことという“常識”」「田中正造の死」で終わりではない（赤上b:pp.11-12. p. 20）。
- 「2011年3月11日東日本大震災時に源五郎沢堆積場が再度決壊、鉍毒が渡良瀬川へ流出した」。現在足尾には巨大な鉍毒堆積場が14か所もある」（赤上b.pp.17-18. P.22. p.40）。
- 足尾銅山は1973年閉山し、1974年古河鉍業が足尾銅山の加害責任を認めた。ここまで約100年の月日が経過していることを忘れてはならない。

13

#### (2) 3.11との共通性

---

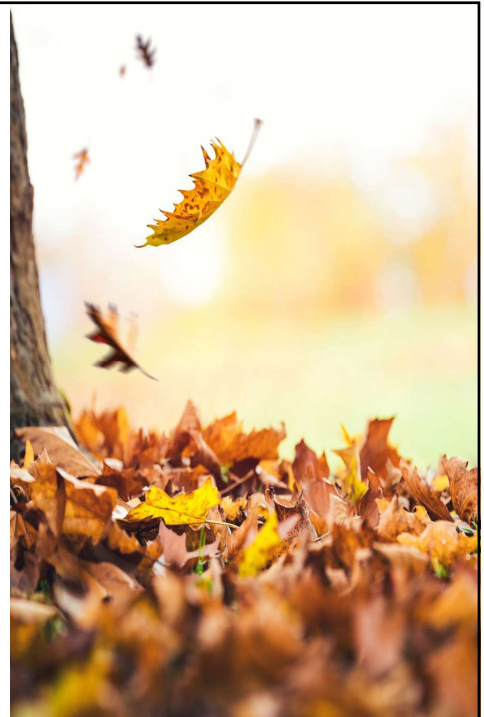
- 次に、「足尾銅山鉍毒被害は終わっていない」に関連して、足尾鉍毒被害と2011年3月11日の東日本大震災の福島第一原子力発電事故との共通性について考える。
- 赤上は、東日本大震災の福島第一原子力発電事故は、100年前の谷中村事件を拡大再現したものであると述べている。
- 両事故とも天災と人災による複合・合成加害、政府、企業（古河鉍業、東京電力）による人災、共に加害の責任があった。
- 足尾銅山鉍毒被害と福島第1原発事故とも、これらは平和研究者のよるヨハン・ガルトゥングが訴える「構造的暴力」と「文化的暴力」の問題である。

14



### (3) 田中正造のグローバルな環境再生思想と公共圏

- 3番目の課題として、「田中正造とアジア」のテーマを日本や韓国だけでなく、世界に広げ、深めていくにはどのようにすれば良いのかを検討する。
- 今後アジアやグローバルの流れの中で、田中正造の生命観・自然観の思想をさらに綿密に分析し、アジア諸国や世界の中で考えていく必要がある。  
高際がいうように、「正造は恐らく世界全体を視野に収めていたのではないだろうか」。



15

### (3) 田中正造のグローバルな環境再生思想と公共圏

---

- では、田中正造の生命観・自然観を足尾の緑や渡良瀬川の水に生かすために、正造の理念と実践をどのように実現していけばよいのか。
- 花崎皋平は、正造の自然観が天地山川の常なる営みに理性と正義の範を見る「治水論」にある、「治水論」は洪水を防ぐ手段や方策の提言だけでなく「社会、道徳ひいては文明に及ぶ哲学を含み、その理念を「活きたる天然」にもとめるものである」と解説している（花崎：pp.298-30）。
- 正造の環境再生思想は、現在の国連による「持続可能な開発（SDGs）」の17のゴールのいくつかと共通、例、ゴール6の安全な水の確保、ゴール11の災害のないまちづくり、ゴール13の気候変動対策、ゴール15の陸の豊かさを守る活動、ゴール17の国、自治体、企業、NGO、大学などによるパートナーシップ。

16

### (3) 田中正造のグローバルな環境再生思想と公共圏

- イギリス人の日本研究家ケネス・ストロング「田中はエコロジストにして環境保護者になった」（ストロング、三浦）。
- 地球の限界の中、SDGsと脱炭素社会を目指す人類は、正造の生命観・自然観から多くを学ぶ必要がある。
- 三浦顕一郎「被害地と被害者を守る闘いのなかでそうになった田中は「土から生まれたリベラル・デモクラット」（三浦： p.229. p.311）。
- 正造の「虐げられる人々との共生・共存」という人権思想は、SDGsの「誰一人取り残さない」というメッセージとの共通性

17

### (3) 田中正造のグローバルな環境再生思想と公共圏

---

- 今後宇都宮大学国際学部多文化公共圏センターとして、どのように田中正造の思想を受け継いでいくのか？それは、高際が同センターに託した願いなのではないか。例えば、筆者は、3.11原発震災後の開発研究として、「共存・共生できる公共圏の創出」の研究をしてきた。
- これは、国家によるグローバル化と市民社会によるローカル化の間に立って、周辺化された人間が共存し共生できる「場」や「空間」としての公共圏の創出が必要であると考えた。
- 筆者は、これを「共存・共生できる公共圏」と述べ「共存・共生できる公共圏」が周辺された人々や脆弱な人々も包摂して合意形成や政策形成を行う場や空間を提供することを提唱した（図1参照）。

18

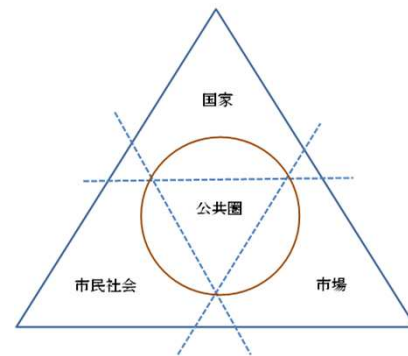
### (3) 田中正造のグローバルな環境再生思想と公共圏

- 「共存・共生できる公共圏」

図1 国家、市場、市民社会と公共圏

出所：重田康博（2017）『激動するグローバル市民社会  
「慈善」から「公正」への発展と展開』p.261

- 「共存・共生できる公共圏」が公共に生きる正造の文明のあり方と重なり、多文化公共圏センターの目指すべきビジョンになるのではないかといことを問題提起したい。



19

おわりに：まとめに代えて

- 今後、日本の開発と公害研究の起源として、足尾銅山鉍毒事件と銅山の「周辺化された人々」に寄り添った公共に生きる正造の環境再生思想研究が求められる。
- 今後の課題で述べた、「終わっていない足尾鉍山鉍毒被害」をどのようにフォローして、「田中正造事業」を受け継ぎ、公正な持続可能な社会の実現を求ていくかである。
- 「田中正造とアジア」は、今後アジアにまず正造の思想と実践を広め、次に「田中正造と世界」として、グローバルな複合危機の時代を生き抜いていく一つの手がかりになっていくのではないだろうか。高際先生の特筆すべきところは、国際学部で英文学がご専門でありながら、広く深く田中正造研究や渡良瀬川の自然を守る活動を実践されていたことである。

20

おわりに：まとめに代えて

- 高際先生の特筆すべきところは、国際学部で英文学がご専門でありながら、広く深く田中正造研究や渡良瀬川の自然を守る活動を実践されていたことである。
- 本稿の中で紹介した「田中正造とアジアⅠ・Ⅱ」の報告者と共通しており、高際先生は正造の思想を受け継ぎ、「田中正造事業」を実践していたといえる。「谷中村遺跡を守る会」の会長としての活動は、その実践の証しである。そのエネルギーの源は、高際先生が田中正造と渡良瀬遊水地周辺地域を深く愛していたからではないかという問いをもって本稿を終えたい。



写真：旧谷中村合同慰霊碑で説明する高際澄雄先生  
「環境と国際社会」「環境と国際協力演習」高橋若菜  
2017年6月18日に撮影

21

おわりに：まとめに代えて

- 最後に、日本の環境・平和活動家の田中正造の言葉として、
- 「真の文明は山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」
- を改めて引用して、高際先生を偲びたい。高際先生、これまでいろいろと教えていただきありがとうございました。心からご冥福をお祈り申し上げます。参考文献宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（2015a）『田中正造とアジア』

22

## 参考文献：

- ・宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（2015a） 『田中正造とアジア報告書』
- ・宇都宮大学国際学部附属多文化公共圏センター（2015b） 『田中正造とアジア報告書Ⅱ』
  
- ・赤上剛（2015a） 「田中正造と戦争－日清戦争支 持から軍備全廃論へ」
- ・赤上剛（2015b） 「足尾銅山鉱毒被害の現状」
- ・鈴木聡（2015b） 「足尾溪谷緑化事業の現状と 展望」
- ・高際澄雄（2015a） 「開会のあいさつと経緯説明」
- ・高際澄雄（2015b） 「開会のあいさつと経緯説明」
- ・丁貴連（2015a） 「田中正造と内村鑑三、そして 朝鮮」
- ・辻岡幹夫（2015b） 「足尾における野生生物の 問題」
- ・朴孟洙（2015a） 「田中正造と韓国－田中正造と 全全準の公共的生き方」
- ・朴孟洙（2015b） 「韓国におけるハンサリム運 動と田中正造の自然観と生命観」

### その他の参考文献：

- ・ガルトゥング、ヨハン著/高柳先男・塩屋保・酒井由美子訳（1991） 『構造的暴力と 平和』中央大学出版会
- ・小松裕（2013） 「解説」 田中正造『田中正造選 集第五巻』岩波書店 第二刷
- ・重田康博（2017） 『激動するグローバル市民社 会「慈善」から「公正」への発展と展開』明 石書店
- ・ストロング、ケネス著/川端康雄・佐野正信訳 『田中正造伝一嵐に立ち向かう雄牛ー』晶文社
- ・花崎皋平（2013） 「解説」 田中正造『田中正造 選集第六巻』
- ・三浦顕一郎（2017） 『田中正造と足尾鉱毒問題ー土から生まれたリベラル・デモクラシー』有志舎

23

ご清聴ありがとうございました。

2014年9月14日『田中正造とアジア』

スタディツアー集合写真（写真：多文化公共圏センター提供）



24

## 1. 文人たちの足尾

はじめまして。国際学部の丁貴連です。私の専門は比較文学です。特に、国木田独歩や有島武郎、をはじめとする日本の近代文学者が、韓国や中国、台湾といった東アジア地域の近代文学の成立に及ぼした影響関係について研究を行なっています。つまり、田中正造の研究者ではございませんが、田中正造の存在とその活動についてはかなり前から知っていました。というのも、私の専門とする明治時代の文学者の中には足尾銅山や足尾・渡良瀬鉍毒と公害に題材した作品を残したものが少なくないからです。中でも夏目漱石の「坑夫」(1908)はその代表的な作品です。『坑夫』は、明治40(1907)年11月下旬のある日、漱石の家に訪ねてきた荒井と名乗る青年から聞いた身の上話をもとに作品の構想を練り、翌1908年1月1日から4月6日まで『朝日新聞』に連載された作品です。漱石自身が足尾に来て取材して書いたものではありませんが、田中正造の議会における鉍毒問題の追及や、明治40年2月の暴動で軍隊が労働争議に介入したことなどで話題の鉍山であり、そこを舞台として坑夫の生きざまを描いてみよう、かなり意気こんで書いたようです。まだ読んでいない方には、足尾銅山の坑内を舞台にした山本有三の戯曲「穴」(1910)や足尾鉍毒を詠んだ伊藤佐千夫・長塚節の長歌とともに一読をお勧めいたします。

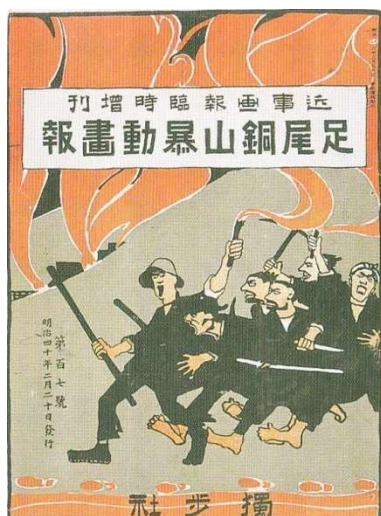
## 2. 足尾銅山と労働運動、そして編集者・国木田独歩「足尾銅山暴動画集」

前置きが長くなりましたが、公開セミナーの報告についてコメントを述べさせていただきます。まず第1部の「足尾銅山山本の戦い―鉍山の仲間とともに」から見ていきます。足尾銅山鉍毒問題といえば、鉍毒に苦しむ民衆のために戦い続けた田中正造が、鉍毒事件の問題解決のために明治天皇に直訴(1901年12月10日)を企てたことが広く知られています。直訴そのものは失敗に終わりましたが、新聞などで直訴を知った人たちは政府と足尾銅山を激しく批判し、被害農民への同情の声が全国から寄せられました。特に都内の学生の間では鉍毒被害地視察の機運が盛り上がり、1901年12月27日には約1000人の学生が安倍磯雄、木下尚江らに引率されて被害地を視察しています。

このように田中正造の直訴は鉍毒世論を起こす上で大きな役割を果たしていますが、実は、その6年後の1907年2月4日に足尾銅山の労働者が暴動を起こし、鎮圧のため軍隊が出動するという大事件に至り、足尾銅山で働く労働者の存在がクローズアップされました。足尾銅山は「公害の原点」として知られていますが、今日の上岡健司さんの話の中で指摘されましたように、足尾銅山は「労働運動の先進地」でもあります。詳細は上岡さんの「古河支配の街での労働者の戦い」を参照されたいですが、注目したいのは、「明治40(1907)年の大争議」、いわゆる「足尾銅山暴動事件」です。

この事件は足尾銅山の坑夫らが、待遇改善などを訴えて鉍山施設などを破壊、放火した事件ですが、明治を代表する文豪の一人である国木田独歩は、この事件を報道するために当時経営していた出版社から取材陣を足尾に派遣して「足尾銅山暴動画報」(『近時画報』臨時増

刊号（明治40年2月20日発行）を発行しています。以下の図は「足尾銅山暴動画報」に掲載された「決死隊の巡査、坑夫を運ぶ」の場面です。



【図1】国木田独歩が編集した『近事画報』臨時増刊「足尾銅山暴動画報」の表紙。



【図2】「足尾銅山暴動画報」に掲載された「決死隊の巡査、坑夫を運ぶ」の場面。鉱石運搬用のトロッコに逮捕された坑夫が載せられている。

他に「坑夫の乱酒」「焼討ち」「倉庫の類焼と役宅の惨状」「南打たる」「家族の避難」「ダイナマイト見張所を破壊す」「巡査の強行偵察」「倉庫焼跡に器皿を拾う」「兵士の巡邏」など、暴動の惨状を描いた絵画とともに写真11枚も掲載されています。この画報は現在、足尾歴史館に「足尾暴動」の記録として保管・展示されていますが、足尾歴史館を訪れる際には「足尾銅山暴動画報」の一読をお勧めします。

「明治40年の大争議」により、足尾銅山で働く坑夫への関心が高まり、夏目漱石が鉱山を舞台とした「坑夫」を明治41年1月から『朝日新聞』に連載したのは前述の通りです。漱石の作品を契機に多くの文人が足尾銅山を訪れ、坑内で働く坑夫とその家族の生活を描いたり、足尾鉱毒を詠んだりした作品を数多く残しています。足尾に関する文献と例えば、鉱毒事件や労働争議、環境汚染問題に関する記録が注目されがちですが、文人や歌人、俳人、画家、写真家、労働運動家、医者たちが書き残した足尾銅山関連作品を読み進めると、鉱毒や公害の専門家たちが見落とししたものが少なくありません。上岡健司さんの講演を聞きながら、足尾銅山鉱毒問題を追及するにあたって、銅山で働いている人々とその生活を描いた作品にも目を通す必要があるのではないかと改めて思いました。

### 3. 田中正造とアジア、そして韓国

次ぎは、第二部の「『田中正造とアジア』を再考する―追悼高際澄雄を偲んで」についてコメントを述べさせていただきます。冒頭でも話しましたように、私は田中正造研究の専門家ではありませんが、宇都宮大学所在地である栃木県とゆかりのある文学者や歴史家、思想家たちについても研究をさせていただいております。そのような関係で、故高際澄雄先生が

企画なさった二つのプロジェクト、すなわち日光における自然程運動や文学者とのかかわりに関するシンポジウム（2012年）と、田中正造没後100年記念シンポジウム「田中正造とアジアⅠⅡ」（2013年・2014年）では研究発表を行ないました。詳細は多文化公共圏センターのシンポジウム関連報告書を参照されたいですが、今日は2013年・2014年に開催された「田中正造とアジア」について若干のコメントを述べさせていただきます。

正造の思想の広がりや深さに共鳴した高際先生は、2度に渡って「田中正造とアジア」についてシンポジウムを開催し、大きな成果を得ています。その成果とは、近年、韓国で民衆の側に立つ田中正造の思想に関心が寄せられていることを浮き彫りにしたことです。その代表が公共哲学共働研究所長金泰昌（1934年～）です。彼は公共哲学を研究・実践している韓国を代表する哲学者・政治学者ですが、東京大学元総長佐々木毅の招聘を受けて2000年頃から日本で活躍しています。佐々木毅共編『公共哲学』全10巻（東京大学出版会、2002）など多数の日本語での共著作がありますが、2010年、田中正造研究の第一人者である小松裕と『公共する人間4 田中正造 生涯を公共に献げた行動する思想人』（東京大学出版会）を上梓し、韓国における田中正造研究の口火を切ったのはいくら強調してもし過ぎることはないと思います。金泰昌は、2012年NHKが放送した「日本人は何を考えたのか 第3回 森と水と共に生きる 田中正造と南方熊楠」の中で、田中正造の思想の普遍性について次のように述べています。

田中正造の精神というのは、物事を民の立場から考える。それも民の力で変えていくというものです。そうすれば、一番重要なのは、まずは生命を育むような生活をまことにするにはどうすればいいのか、それを成り立たせるための生業をどうつくり上げるのか、ということになります。この考えを、国家という壁、文化・宗教などの壁を越えて、広めて、互いに協力し合うほうが相互の利益となり、生命の育ちあいにもより貢献します。ある意味で正造は、日本国内だけに独り占めするにはもったいない人間像であると高く評価し（中略）正造の思想を我々はもっと考え抜く。それは世界で共有するだけの価値があるものなのです。

金泰昌は、正造の思想を「日本国内だけに独り占めするにはもったいない」と指摘しましたが、正造の思想はすでに国境を越えて広がっていました。

戦前、日本に留学した韓国の知識人たちの中には内村鑑三の弟子になった者が少なくなかったのですが、中でも柳永模（1890～1981）、咸錫憲（1901～1989）はその代表的な弟子と言われています。柳永模は韓国のキリスト教思想家であり教育者ですが、彼は日本に留学中に内村鑑三と交流し、咸錫憲に日本に行くと、ぜひ内村鑑三のところに行けと助言するほど、内村鑑三の思想に深く共鳴しました。彼の勧めで内村鑑三の門下生になった咸錫憲は植民地下の朝鮮に「無教会キリスト教運動」を展開し、内村鑑三の思想とその活動が韓国社会に広く知られる契機を作りましたが、咸錫憲ら韓国の留学生たちは、内村鑑三が足尾銅山鉍毒問題の解決のために抵抗運動を行っていたことは知っていました。しかし残念ながら



ら、当時の彼らには田中正造に関心を示すほど精神的な余裕を持っておらず、田中正造の思想が韓国に本格的に紹介されるようになったのは、金泰昌の登場まで待たねばなりませんでした。

## 5. 内村鑑三と足尾鉍毒、そして田中正造

内村鑑三と言えば、まず思い出すのが不敬事件です。この事件は1891年（明治24年）1月、第一高等学校での教育勅語奉読式場で下賜された勅語の明治天皇の署名に「頭を下げなかった」ことで、不敬漢、国賊として、天下の「識者」の囂々の非難をあびた有名な事件です。内村鑑三は自分の愛する国から激しく非難され、「世に住む所なきの苦痛を味わいました。この体験から弱者の苦しみを理解するようになった内村はジャーナリストとなって、日本社会の不義・不正に筆誅を加えようと努めました。

もう一つ忘れることのできない事件は、日清戦争の時は「義戦論」を唱えた内村鑑三が自らの間違いに気づいて、日露戦争のときには「非戦論」主張したことです。以後、内村鑑三は聖書研究会と1900年に創刊した『聖書之研究』誌を拠点に、独立のキリスト教伝道者として無教会主義のキリスト教を唱え、生涯を歩むこととなりますが、この日清戦争と日露戦争の間に足尾銅山鉍毒問題解決のための運動を展開し、田中正造と深くかかわるようになったのです。

鑑三が、足尾銅山の鉍毒問題について初めて言及したのは、『万朝報』に掲載された明治30（1897）年3月16日の英文「山についての悪聞四題」の中です。四つの山とは、第一は京都本願寺の大本山の問題、第三が顕彰碑建立をめぐる不正が発覚した上野の挿鉢山、第四が教科書出版社の増収賄に絡まる山賊たちのことです。いずれも不正問題を抱えていた四つの団体を取り上げ、日本社会の不義不正について社会の弱者の立場から論じたものですが、この論文を執筆することによって足尾銅山の鉍毒問題を追及していた田中正造との関わりが生まれました。内村鑑三がはじめて足尾の鉍毒地を訪れたのは、明治34（1901）年4月22日です。前日の4月21日、栃木県足利の友愛義団に招かれた内村は、木下尚江、巖本善治らとともに講演を行います。翌日、仲間と鉍毒被害地を視察した内村鑑三は、あまりのひどい惨状に衝撃を受けました。札幌農学校で土壌学を学んでいた内村鑑三は鉍毒の被害が想像以上に大きいことに気づき、何よりも明治政府の対応のまずさに強い怒りを覚えました。早速『万朝報』に「無能政府」という題の論説を掲載し、政府の対応の悪さを辛辣に批判しました。さらに同紙に4月25日から30日にかけて「鉍毒地巡礼記」を4回に渡って連載し、足尾銅山の鉍毒の原因は、天災ではなく、経営者の古河市兵衛が起こした人災であると次のように指摘しています。

語を寄す、世の政治家よ、1日の間を盗んで行って被害地を目撃せよ。世の小説家よ、杖を渡良瀬川沿岸に引き見よ。諸氏は新たなる趣向を得て一大悲劇を編むを得ん。詩人よ、農夫の貧と工家の富を対比せよ。諸氏の韻文に新たに正義の加えられるを見ん。足尾銅山鉍毒事件は大日本帝国の大汚点なり。これ実に国家問題なり。しかり人類問題な

り。(『万朝報』1901年4月25日～30日)

科学者の目で被害地の惨状を目の当たりにした内村鑑三は、鉱毒問題は一地方の問題ではなく、「国家問題」「人類問題」とであると認識し、政府を批判しました。

批判記事を書くだけでなく、内村鑑三は田中正造をはじめとする有志たちと足尾銅山鉱毒反対運動にも積極的にかかわっていきます。5月21日には、東京キリスト教青年会館で足尾鉱毒事件の「同情者」の会が開かれ、田中正造が説明し、鉱毒調査有志会が結成されました。そして6月21日に鉱毒調査有志会による調査が、内村鑑三を主査とし、田中正造を案内役として行われました。7月20日には塚利彦、黒岩涙香、幸徳秋水たちと「理想団」を発足させます。そして、聖書研究などを通じて学生たちに鉱毒地視察を呼びかけます。12月20日には800余人の学生からなる鉱毒地視察旅行が行われました。ここには志賀直哉などの若い文学者も多数参加し、足尾銅山の鉱毒の被害を広く世間に訴えました。

しかし、1902年(明治35年)に入ると、4月に行われた鉱毒問題解決演説会に出席したことを最後に、内村鑑三は足尾鉱毒事件から離れ、聖書の研究に打ち込みます。キリスト教徒として聖書の研究を行っていた内村鑑三が、鉱毒問題に関心を示し、反対運動に深くかかわっていた背景について、内村鑑三研究者の鈴木範久氏は次のように述べています。

足尾の鉱毒問題は、単なる物質的な鉱毒ではなく、それよりももっと激甚な毒である古河市兵衛のみだらな心の欲望によるとみていた。それが、鉱毒反対運動にかかわる中で、反対運動の実践家にも被害地の農民にも、欲望による腐敗堕落のあることを認めた。このことが、社会の改良には、社会自体の改良よりも、まず個人の改良が優先され、それには聖書によるしかないとの思いを深めたのだった。(鈴木範久『内村鑑三』岩波新書、1984年)

つまり、内村鑑三は足尾の鉱毒問題を、人間のみだらな心が引き起こす「心の欲望」と見ていました。歴史、神、イデオロギーのような絶対的な価値が崩壊し、集団から個人へ、イデオロギーから欲望へと失速していく高度資本主義世界の現在、新たに急浮上した「欲望」を前に人類は何をなすべきかが問われていますが、その課題について内村鑑三は100年前から指摘していたのです。

田中正造の思想を初めて韓国に紹介した金泰昌は、彼の思想を日本だけに独り占めするのはもったいないと語っていますが、今回の公開セミナー「語り継ぐ足尾Ⅲ―問題に抗い続ける人々」を聞きながら、故高際先生が企画なさった「田中正造とアジア」のようなシンポジウムが、これから韓国や中国、ロシアなどでも開催されることを改めて思いました。